

ICT分野における技術戦略検討会（第6回）議事要旨

1 日時 平成30年3月20日（火）9：30～11：15

2 場所 総務省第3特別会議室（11階）

3 出席者

（1）構成員（敬称略）

長谷川座長、中尾座長代理、内田構成員、江村構成員、関谷構成員、田中構成員

（2）総務省

今林国際戦略局長、椿国際戦略局参事官、布施田技術政策課長、山碕国際政策課長、中溝通信規格課長、田沼研究推進室長、杵浦技術政策課統括補佐

4 議事要旨

（1）情報通信技術をめぐる現状と課題（これまでの議論の整理）

事務局より、資料6-1-1、資料6-1-2及び資料6-2に基づき、説明が行われ、その後、意見交換が行われた。

主な意見は次のとおり。

【失敗に学びながらはやく進むアプローチ】

- SBIRのように、政府調達の一環として国がベンチャーの顧客となり、売り上げに貢献する仕組みを作ってはどうか。
- ベンチャーや大学の研究機関が大企業とペアで応募する仕組みをより推進してはどうか。
- 「はやく進む」は比較的短期の研究開発成果に求めている行動であり、「失敗に学びながら」は長期的な研究開発目標に対し、失敗に学びながらゴールに向かっていくという研究開発のあり方の一つ。この二つを必ずしもセットで考える必要は無いのではないか。
- 失敗を恐れずに動くための支援や、失敗しないためのプロセス管理等は必要だが、失敗を許容しすぎると「責任の無さ」に繋がるので注意が必要。
- 「チャレンジして成功した人」、「チャレンジして失敗した人」、「チャレンジせずに成功した人」、「チャレンジせずに失敗した人」の評価順序を間違っはいけない。今は「チャレンジして失敗した人」より、「チャレンジせずに成功した人」の方が評価さ

れていることが課題。

【個人の活躍とコミュニティ】

- 結果として個人に支援されるのであれば、プロジェクトやコミュニティへの支援でも良いのではないか。
- 研究開発のゴールに対し複数のアプローチを許容することで、個人個人がやりたいと思う研究開発が行う事ができ、ワクワク感を持つことに繋がるのではないか。
- 目標の設定にあたっては、すぐには実現が困難と思われる挑戦的な課題設定をするものがあってよいのではないか。
- まず初めに、技術的な切り口のハッカソンを行い、その後、参加者を研究開発や課題解決に誘導するといった、段階的な仕組みがあってもいいのではないか。
- 産学共同の人材育成や、技術系人材・マネジメント系人材共同の人材育成を活性化すべき。
- 今は、最新の研究開発状況が1～2年遅れて浸透している状態であり致命的。参加対象者が広い情報共有の場や勉強会のような場が必要。
- 社会人ドクターは即戦力の能力を持ち、最新の情報を把握できる立場であり、産学官連携で非常に活躍する。社会人ドクターが活躍する場を設けるためにも、産学官連携を推進する仕組みが必要。
- 秀でた能力を持つ子供をより先鋭させることが出来る、課外授業のような場があると良い。
- Google 等の成功している海外 OTT と連携できる仕組みをつくり、日本企業が学ぶ機会があると良い。

【デザイナー／アーキテクト】

- 企業はデザイナー／アーキテクトを育てるキャリアパスを検討し、新しい体制を作っていないと行けない。

【その他】

- 技術成果ではない評価尺度を入れることが必要。
- SDG s と今の研究開発の関係をもう少し議論すべき。
- 破壊的な研究開発を許容するテストベッドや環境は必須。
- 今の教育カリキュラムは、今の日本をつくり上げるカリキュラムになっている。次の日本をつくり上げるには、徐々に教育カリキュラムを変えていかないといけない。